

ていましたよ」と聞いた時は、「あの控え目な母がああ程度のことを喜びとして何と言ったのだろうか。敗戦後、労のみ多く幸せ薄かった母の亡くなる直前に、小さな喜びを与えることができ、少しは親孝行をしたことになったのだろうか」と絶句した。

その後、沼津、三島、下田と配置換えになり下田に単身赴任中に心臓発作を起こすようになり、循環器病院に緊急入院し、「経皮的冠動脈血管形成術」を受けたのを潮時と考え、上司に辞職を申し出て、平成六（一九九四）年に定年まで三年余を残して依願退官した。五十九歳だった。

退官後は、全く分からなかった父の学歴、部隊略歴、戦闘歴、抑留地などを精力的に調査した結果、たいしたことは分からなかったが、本文中に記した程度のこと判明した。

そこで、食事制限を守り、ウォーキングで心臓を鍛え、身体に自信のついた平成八年から、ふるさと満州を二度、引揚げ上陸港の佐世保を一度訪

ね、往時を検証して歩いた。

次に、墓参団を見つけては参加させてもらい、出発の日には必ずお寺に行き、お墓の母に「一緒に行こうね!」と声をかけて母と二人でこれまでに三度、ハバロフスク州ホール地区を訪れ、そこに眠る父と大勢の方々の英霊に「心安らかに眠りください」とお参りをしてきた。

最後に、世界平和を祈り、先の大戦で亡くなった方々及び遺族で既に物故された方々に合掌して擲筆する。

父と満州の思い出

滋賀県 上谷 岩三

プロフィール

私は昭和五（一九三〇）年の正月元旦に、華民国哈爾濱道裡拾四道街拾四号（当時の住所表示）という所にあつた自宅で生まれ、そしてハル

ピンを生まれ故郷として育った。

父は、仕事の関係からハルビンに腰を落ち着けていることもできずに、満州国内の各地を転々と動いていた。そのために、私には弟や妹が五人もいるが、生まれた所はハルビンのほか、寧安とか牡丹江などで、みんなはそれぞれに生まれた所を故郷といって懐かしがっている。

この間に、私たちの一家も父の動きに従って各地に移り、そこにある学校に転校し、生活が続いていた。父は昭和十八年に突如として病魔におかされて、そのまま志半ばにしてこの世を去ってしまったが、残された私たち家族は、それからもハルビンに住み、そこで終戦も迎え、そしてそこから苦難の道をたどって日本内地に引き揚げて来たのであった。

一 父の渡満と活躍

父、上谷正道は当時のハルビンが経済的に活況を呈していることを知り、満州大陸での事業を宿願として、「日露貿易」「日貨普及」を旗印として

満州に渡ることを考えていた。大正の末期に、祖父から事業立ち上げの軍資金として、当時としては大金であった千円をもらって、朝鮮経由で満州に渡り、一応の目的としていたハルビンに直行して、中国人街の真っ只中に生活の居を構えて、そこで身を粉にして働き着々と実績を挙げていた。

日露貿易を主たる事業としていたので、ハルビンである程度の地盤を固めると、当時極東ロシアの中心地であったウラジオストックに新たに店を設けて、ハルビンとウラジオストックの間を往き来して日露貿易の事業を始めた。

持ち前の闘志と商売熱心に加えて先見の明の鋭さに、他の同業者より一步抜きん出ている、業績はどんどん上がっていた。その後、事業の根拠地としてハルビン市街のモストワヤ街に店舗を新築し、屋号を「高岡号」と命名した。

あるとき、ウラジオストックの店に出張していた高岡号の社員が、ソ連の秘密警察のゲーペーウーに捕らえられ、裁判にかけられるという事件

が起きた。その社員が商取引のために、現地のソ連人と深く接触していたので、反革命運動の活動をしているのではないかと疑われたからだだったが、父はすぐにウラジオストックに飛んで行き、「ソ連国内の政治活動には一切関知していない」との弁明を行って、やっとのことで釈放してもらったことがあった。

大正六（一九一七）年に起きたロシア革命の余波が、本国から遠く離れた極東の、そのまた外れのウラジオストック方面にも波及してきていて、今までのような商売を続けることができなくなっていた。父は、その情勢をすぐに読み取り、適切な判断により何ら躊躇することなく、今まで築き上げてきたウラジオストックの店をたたんで、事業の鋒を「日露貿易」から、主として中国人を相手とする「日貨普及」に向け替えた。

新店舗を吉林省寧安の寧古塔城後（通称ニンングタ）に構えて貿易館と称して、中国人相手に日本の食料品や雑貨などを商い、ソ連の共産革命によ

る混乱が終息するのを待つこととした。父の目には狂いがなく、寧安での商売も順調に進展していった。しかし、昔から言われているごとく、「好事魔多し」のとおりで、やっと順調に対中国貿易が行われていた昭和六年に満州事変が起きて、中国東北部を中心に治安が乱れてきて、馬賊・匪賊の出没が激しくなってきた。

商売繁盛だった店は、経営者が日本人であることもあって、馬賊・匪賊に狙われることは当然であって、いち早く目をつけられて、再三にわたって襲撃を受けるようになってきた。店の炭小屋に隠れていて間一髪で難を逃れて日本軍に救出された父は、寧安での営業は不可能であると判断して商売を諦めて、店を閉めハルビンに引き揚げた。しかしそのうちにハルビンの治安も悪くなってきたので、再起を図るために一時日本に帰国することを決心して、それまでに苦勞をして築き上げた全財産をそのままにして、家族を連れて故郷に帰った。

満蒙開拓史上大きな事件の一つである鏡泊学園事件といわれる惨事が起きたのもこのころのこと、満州国建国前後の中国東北部全土は治安が乱れ、いろいろと悲しい出来事も起きた最悪の状態であった。

満州事変は日本の意図する方向に向かって終息し、ついに満州国が建設され治安もだんだんと回復しつつあった。機を見るに敏なる父は、すぐに再度満州に渡ることを決心し、昭和七年四月に一家を挙げて故郷を出発し、久しく無人のままに放置されていたハルビンの店に戻り、復興に精力をつぎ込むことになった。父はハルビンに戻るとすぐに寧安の貿易館に行き、日貨普及の貿易業務を再開した。

満州国建設の槌音も高く、満蒙開拓、五族協和、日本を守る生命線などと囃されて、満州国発展のための日本の国策が進められていたが、その中で最たるものは、満ソ国境に近い各地の開拓のため日本から、武装移民団として開拓戦士が

続々と送り込まれて、開拓を始めたことである。そしてそれに伴っていろいろな仕事をする人たちも渡満して来たので、日貨普及といっても対満人だけが相手でなく、日本人相手の商いも盛んになつてきた。

ハルビンでの生活もだんだんと落ち着きを取り戻して、以前にも増して活気が増し、それに伴って治安も良くなり、市街地も逐次整備されて異国情緒たっぷりの都会となり、日本内地からも新天地に憧れてひと旗挙げようという人を含めて、「満州へ、満州へ」「ハルビンに、ハルビンに」ということで賑わいを呈してきた。

そのころ父は、取引きのあつた中国人の陳さんから、「最近、木材の値段が急騰している。うわさによると牡丹江に大きな都市ができるらしい」という話を聞いた。昭和八年の春には、南満州鉄道株式会社（満鉄）により図佳線（図們―佳木斯間）が、牡丹江經由での路線の建設が決定し、それによりさらに活気が増し建設関係者はもとより

のこと、満州国全体の治安維持という名目で、軍隊も各地に駐屯することとなり、そのための施設建設も盛んになっていた。

図佳線と濱綏線（ハルビン―綏芬河間）の交差する所に大都市を作るという構想は以前からあったらしいが、図佳線が開通すると現在の牡丹江市は、産業、経済、交通そして軍事上などあらゆる部門の中心となり、飛躍的な発展は間違いない所であった。

機を見るのに敏なる父は、従来の営業方針を急転回して、日貨普及について本格的な取り組みをすることを考えて、牡丹江市の西長安街に土地を取得して、ここを高岡号の本拠とした。事業は好調に進展し、高岡号という屋号も全満州に知られるようになった。現地人を相手とする商売は、市内の中国人街の真ん中に店を出し、日本人相手の商売は新市街に新しく店を開くこととして、牡丹江領事館前に土地を求めて、昭和九年にコンクリート二階建ての新店舗を開店し、屋号は「高岡

号百貨店」とした。百貨店の開業に当たっては、

①集客力、②購買力、③危機管理、④従業員の確保、⑤仕入れ先の信頼性の五項目を最重視したが、これらのことは現在の百貨店、または商店経営者でも同じであろう。父の経営理念の並々ならぬものが、はっきりと分かることであった。従業員は、父の縁故によって大阪阪急の百貨店から社員をヘッドハンティングし、商品は大阪から清津を経由して牡丹江まで運ぶというルートで仕入れ、必要な資金は横浜正金銀行からの融資を受ける事となった。昭和十一年当時の牡丹江市の在留邦人は約一万九千人で購買力は十分にあり、近代化された百貨店ということ、繁盛のマイナス要素はなく順調に伸びていた。だが、人生にしても商売にしても、そんなに良いことばかりが続くことはなく、ときには逆境に陥ることもあるが、まったくそのとおりで、再び好事魔多しということが訪れた。

開店二年目の昭和十一年の冬に、煙突の過熱か

ら小火を出してしまった。当時は牡丹江の市街地の防火態勢も未整備で、消防車を呼ぶにしてもそれに応える消防署がなかった。父はそのときの苦い経験に懲りたか、その後消防車数台を購入して市に寄付をした。

二 私の小稚見習い時代

父の経営する高岡号百貨店の業績が順風満帆のごとく繁栄しているころは、私はまだ小学生であった。学校から帰るとすぐに店に行つて邪魔ばかりしていた。ときには、仲良くなつていた店員の仕事を手伝うこともあったが、邪魔することの方が多かった。店に行かない日は、同級の中国人の友達と魚釣りに行つたり野球をしたりしていた。そのころは、ベースボールは時代の先端をいくスポーツだった。大部分の友達は素手でボールを追っていたが、手製のグローブ（らしき物）を持つ子も数人いた。しかし、私はその当時はまだ珍しかった本革のグローブを買ってもらつて、それを自慢して見せびらかしていた。そのように勉

強の方はそっちのけで、遊びに夢中であった。

父は、そんな私のことを心配して家庭教師をつけて、週一回の割合で強制的にみっちり勉強をさせた。だが、それでも遊びの方が気になって、あまり勉強には身が入らずに、家庭教師の学生を随分と困らせていたし、両親も心配の種だった。

小学六年生の夏休みには、店の仕事を手伝わされたことがあった。その仕事は、主として毛皮類の商品見本で、ハトロン紙で梱包したものを持つて牡丹江駅から一人で汽車に乗り、ハルビンの店に届けるという仕事であった。一人で汽車に乗れるというので、意気揚々として牡丹江を出発してハルビン駅に着いた。駅にはハルビンの店の人が迎えに来てくれた。ハルビン市街のモストリヤにある店に行くのに、タクシーに乗せてくれた。タクシーの運転手は白系ロシア人で、迎えに来た店員が、「モストリヤ、タカオカ」と言っただけで、その運転手は「ダー、アジンルーブリー、スパシーバ（はい、分かりました。有難うございま

す」と答えて、車は繁華街を通って店に着いた。当時のハルビンの高岡号百貨店は、これだけ名が通っていた。

その後、我が家は牡丹江から再びハルビンに居を移して生活をするようになった。そして父は、ハルビンで次の仕事を着々と準備していた。

昭和七年に満州国が独立し、その翌年の昭和八年には、ハルビン市会は市の行政権を満州国人に返還した。それによりハルビン居住の白系ロシア人は、だんだんと奉天（瀋陽）とか新京（長春）などに移って行き、ハルビンにいるロシア人は少なくなっていた。それでもまだ大分いたが、大東亜戦争が始まりだんだんと戦局が厳しくなって、日本不利というわきが流れるころになると、上海などを經由してアメリカに移住する者が増えてきて、終戦時にハルビンにいた白系ロシア人は、わずかに約二千人であった。白系ロシア人が、ハルビンからだんだんと姿を消してくるに従って、活気もなくなっていた。白系ロシア人の経営して

いた、「チューリン洋行」は売り上げが落ち、業績不振となって遂に「香港上海銀行」の管理するところとなったが、実は父がこのチューリン洋行を買収することをかねてから考えていたらしく、負債が多くなりよいよ危ないというころから、この洋行の買収の準備にかかっていた。

ハルビンでの私の生活は相変わらずで、勉強はそっちのけのことが多かったが、それでも週一回の家庭教師による指導は受けていた。家庭教師はハルビン大学の学生だったが、教え方はあまり上手ではなかったような気がする。勉強にはやかましかった父ではあったが、将来私にこの高岡号の経営を継がせようと思っていたらしく、丁稚小僧見習いについても力を入れていた。

父が、チューリン洋行に買収の話に行くときには必ず私を連れて行き、父が話し合いをしている間は、洋行の店員に「この子に店内を見せて、いろいろと説明してやってくれ！」と言って、売場見学をさせた。また、夏休みになると、ハルビン

以外にある店にも連れて行ってくれた。奉天のアジアビールの会社にも行き、ビールの生産工程を細かく教えてもらった。だが、そんな父も、日々の東奔西走の疲れが災いとなったのか、昭和十八年の秋に突然に倒れ病床に伏してしまい、あまり長患いをせずにこの世を去ってしまった。志半ばで死んだことは、父もさぞかし無念に思ったことだろう。

ハルビン中学の二年生であった私は、そのまま学業を続けることとなり、高岡号の経営は幹部社員によって守り立てていくことになった。

三 終戦そして、難民救援

昭和二十年八月十五日、私はハルビン中学校の四年生になっていたが、学業に精励することはできずに、前年の秋から学徒動員で、ハルビンの郊外にあった北機械製作所で飛行機のエンジン製造の一翼を担っていた。この北機械製作所というのは、満州国最大の飛行機生産会社である満州飛行機株式会社が、奉天から工場疎開をしてきた工場

であった。

四年生の動員先は、数カ所に分かれて動員されていて、遼陽の火薬工場、同じく遼陽の自動車工場、それに北機械製作所が主力動員先であった。

十五日の朝、始業前に付き添いの指導教官から、「今日は正午に重大な放送があり、学校に集まって聴くことになったので、今日の作業は一時中止して今から学校に戻るように」という指示があった。一体工場を休んでまで聴くような大事なことはなんだろうと訝ったが、それよりも久しぶりに学校に行くことの方が嬉しく、みんなは喜んで学校に向かった。職場の人にも断りの挨拶をしたが、職長、組長など責任ある人たちも、ラジオ放送がなんであるのかは知らずに半信半疑の様子だったが、快く許してくれた。

学校に着くと、既に動員に行っていない一、二年生は校庭に集合していて、校長先生たちも集まっていた。正午、放送は始まったが、「ピー、ピー」「ガー、ガー」という雑音が大きくなった

り小さくなったりして、誰かが話をしていることは分かったが、内容はよく聴き取れなかった。放送が終わってから校長先生が、ラジオで話されたのは天皇陛下であるということを言われたが、私たちには思いもつかないことで、まったく気が付かなかった。校長先生は放送の内容について訓示をされた。そこで初めて、「日本が負けた」「戦争が終わった」ということを知ったが、なぜかぴんとこなくて、実感が沸いてこなかった。

「直ちにそれぞれの家に帰り待機せよ。これからのことは後刻、校長より指示する」ということで、すぐに家に駆け戻った。近所の人たちも、うろうろしていた。その当時、ハルビンにいた在留日本人で、四十歳以下の男子はほとんど召集されていたので、近所の家でもご主人のいない家が多かった。もちろん我が家では父が亡くなっていたので、一家の大黒柱がいけないことは同じで、帰って母を見ると、母も落ち着かず茫然としていた。私は母に気合を入れた。そしてこれからの我

が家のなすべきことについて話し合いを始めた。

八月九日にソ連軍の不法侵入が始まり、国境数カ所から戦軍を先頭にして北滿に侵攻して来たときに、妹二人は南の遼陽の店に避難させていたが、家族が別れ別れになってしまふことを一番に恐れたので、すぐに帰って来るように連絡をとった。三日後の十八日に遼陽の店の若い社員に連れられて無事に我が家に戻って来た。これで家族はそろったので、取りあえずは我が家族一同は籠城することとした。

八月の末になると、ハルビン市街にもソ連軍が進駐して来た。当然、ハルビンに駐屯していた日本軍は、ほとんどその場で武装解除されていたので、戦闘は起こらなかったが、市内は一時険悪な情勢になっていた。もちろん外出もほとんどできずに、家の中に閉じこもっていた。市中にはソ連軍の戦車が要所要所に警戒配備についていて、外を歩いているのはソ連兵と腕章や赤い小旗を持った中国人だけで、十五日以前のハルビン市街の人

通りと較べると、まるでゴーストタウンのようであった。

九月上旬になると、ソ連軍による日本男性の拉致が始まった。いわゆる後に言われた「男狩り」で、戦利品をソ連本国に運び出す作業を日本軍の捕虜を使って実行する計画だったが、日本軍の捕虜の人数がソ連軍側の見積もりと随分違ったので、その不足を一般の日本人で穴埋めするための行為であった。

はつきりした月日は忘れたが、確か九月中旬のころだったと思うが、私は石炭がらを捨てに行こうと家を出て捨て場に向かう所で、突然ソ連兵から自動小銃を突きつけられて、「ダワイ！　ダワイ！」と言われて連行されてしまった。連れて行かれた所は、ヘルビン郊外の香坊という所にあった収容所で、そこにはすでに数百人の日本人男性が収容されていて、その数もだんだんと増えていた。私は、暖房のある家の中から出たままの姿で連行されたので、シャツ一枚で寒くてしょうがな

かった。昼はまだしも何とかしのいだが、夜は床にごろ寝だったので寒くて寒くて眠ることができずに一晩中震えていた。翌日、どこの誰とも分らないが、開拓団の人らしい方が、持っていた綿入れの防寒衣をくれた。奥地から命からがらここまで避難して来た人にとっては、貴重な防寒衣だったのでだろうが、震えている私の姿を見るに見兼ねたのか、惜しげもなく私にくれたことを感謝した。後日、あの引揚げ道中の苦勞を体験するに従い、そのときの見知らぬ人の情けが身にしみてきて、心の中で感謝の手を合わせたものだった。おかげさまで、やっと人心地がついて眠ることができたが、これからどこに連れて行かれどうされるのかと思うと、不安で不安で食欲もなくなり、熟睡もできずに体力が日に日に衰えてきた。数日経っても何の処置もされずに、ただ座らされているだけだった。

支給される食事も粗末なもので、相変わらず食欲は全然ないので、空腹で横になってばかりい

た。もちろん所持金などは全然ないので、食べ物を買うこともできなかった。ただ、そばに水道があったので、水だけは不自由なくがぶがぶと飲んで腹を膨らませた。そのうち空腹に耐えられずに、周囲の人たちと一緒に隣になって隣の倉庫から高粱を盗んできては、そのままポケットに入れていた。監視のソ連兵の目を盗んでは、付近から枯草を集め空缶を拾って来て、盗んだ高粱を入れて炊事をした。しかし、高粱をただ煮ただけなので味もなく、腹の中に流し込むだけだったが、それでも少しは空腹感が薄らいだ。

一週間ぐらいそんな生活が続いたが、やっと監視兵から、「これから出発する！」と言われて並ばされ、点呼をとり列をつくって駅に向かって歩いた。ホームには列車が停車していて乗せられた。その列車は、屋根も囲いもない無蓋車だった。約二千人の日本人が乗せられた。通過する駅の標示板を見て、牡丹江に向かっていることは分かった。列車は途中で長時間停車した。すぐに車

外に降りて、枯木を集め井桁に組み火をつけて暖を取り、炊事をして食事を摂った。枯木は針葉樹なのでよく燃えて暖かく、体の前の方は熱いくらいだったが、背中は反対に底冷えをしていた。もうすでに北満は冬の様相を呈していた。長時間の休憩が終わると、用便を済ませて再び列車に乗り込んだ。そのたびにソ連兵による点呼があったが、ほとんどのソ連兵はせいぜい一桁の数しか数えられないので、適当なところで、「ハラショー！」と言って点呼を打ち切るの、その場から脱走しても彼らには全然分からなかった。脱走する人もいたが、ここで集団から離れては、無事にハルビンに帰る自信がなかったので、私は一応牡丹江まではこのまま連れて行かれることを望んでいた。一週間ぐらいかかって、やっと牡丹江の市街が見えてきて、列車は牡丹江駅の手前の信号所に停車した。人数はかなり減っていたが、ソ連兵には分からなかった。最初にハルビンで乗車したときの正確な人数を把握していないようなので、途中で

脱走した人がどのくらいいたのかも分かっていない様子だった。

信号所で、ソ連軍の将校から「五十五歳以上の者と、十八歳以下の者はここで降りる」という指示があったので、該当者はみんな喜んで貨車から降りた。そのとき偶然前の貨車に、ハルビン中学の牧島金三郎校長がおられたのを見たが、校長先生も元気にしておられたので安心した。ここではしばらく待機していると、今度は反方向から客車を連結した列車が到着した。ソ連兵が、「これに乗れ！」と言うので乗車したが、今度は全部で百人ぐらいであった。列車はハルビンに向かって走り出した。だが、本当にハルビンに行くのかどうか分からないので、一同は不安であった。しかし、今度は快適に走り、数時間して懐かしいハルビン駅に着き、降ろされた。牡丹江に行くときは一週間もかかったのに、今度は数時間であった。まったくどうなっているのか不可解な一週間であった。すぐに家に戻った。母に言われてすぐに

着ていたものを全部脱いだら、シャツにもズボンにも下着にも、縫目という縫目の中には虱がびっちりについて行列をつくっていた。これにはびっくりしてしまった。母はそれを全部焼却したが、燃えているときには何か、ぴちぴちと音を立っているような気がした。

多分、九月の末か十月の初めのころだったと思うが、モストワヤ街でソ連軍の戦勝パレードがあつて、車体にUSAと標示されているアメリカ製のトラック数十台にソ連兵を満載して、市街の目抜き通りから市外に向かって進んで行ったのを見学した。乗っているソ連兵の服装は割合にこざっぱりしていて、終戦になってすぐにハルビンに進駐して来たソ連兵と較べると、服装も整っていたように思えた。それから間もなくすると、ソ連軍発行の軍票が市中に出回り始めた。拾円札を例にとってみると、満州中央銀行の百円札と同じ大きさで、拾円という金額表示以外は赤一色で、「蘇聯紅軍司令部」と記されてあつた。しかし、

軍票よりも従来からの満州紙幣の方が一般に信用があった。この軍票の流通期間は短くて、昭和二十一年の暮れに中共の正規軍がハルビンに進駐して来たときに、無効になり紙屑同然となつてしまつた。

知人の中国人は、そのころ石鹼を造つて売りさばき大儲けをして、ソ連軍票をマータイ（麻袋）に七袋も貯めていたが、これが全部無価値となつたので、彼はそれを自宅の玄関前に置き、玄関を出入りするたびに軍票の束を足で蹴飛ばしては、罵声を浴びせて怒りを態度に表していた。

私は毎日、することもなくぶらぶらしていたが、ある日知人から、在ハルビン日本人居留民会が北満などから避難してきて、ハルビン市内に収容されている人々を助ける仕事をしているので、その手伝いをしないかと誘われた。もちろん無報酬で手弁当の仕事であり、今言うボランティアのようなものであつたが、喜んで応ずることにした。

収容所にいる人たちの多くは、開拓団など北満の奥地から避難して来た人で、ほとんどの家では夫が召集されたまま、女、子供、老人のみでここまでたどり着いた人たちで、それこそ着の身着のままの姿であつた。十月ともなれば、ハルビンではもう冬の様相で、特に朝夕の冷え込みは厳しく、夏物一枚でいる人にとっては耐えられない寒さであつた。もちろん所持金のある人は少なく、まったく悲惨極まりない状態であつた。

私のように戦前からハルビンで生活をしている人たちは、敗戦になつて日常生活が苦しくなつたといつても、まだまだ衣類も食料品もあり、あまり困ることがなかった。そのような人々に衣類などの供出を求めて集めて回り、それを整理して収容所に持つて行って希望する避難民の人々に分配するのが、仕事であつた。荒木さんという責任者の下で手伝いをする事になつた。私は仕事の合間には、収容所の子供二、三人を連れては市場に行つて、豆乳や油条（ユーティアオ）などを買つ

て食べさせたものだった。避難民の人たちの生活は、極度に苦しくなっていたが、この冬をなんとか乗り切るためにはお金を得なければならず、それぞれ仕事を求めて働いていたが、小さな子供がいたり体が悪かったりで、働こうにも働くことのできない人もいた。それらの人は配られた衣類などを持って街頭に立ち、「誰要、誰要」と言っている中国人に売り、そのわずかなお金を食べ物に代えていた。まったく背に腹は替えられぬの諺通りであつた。

引揚者救援の仕事をしているうちに、早くもあの敗戦から一年が経ってしまった。その間に国共内戦もあり、なかなか平和なハルビンにならなかったが、八月の下旬に勝利を得た中共軍がハルビンに進駐して来た。約百人ぐらいの一団が、モストリヤ街を整然とした四列縦隊で、キタイスカヤからドウワイに向かつて行進したが、兵隊の服装は草色のつばの付いたアンパン帽をかぶり、同じ草色の長袖の制服を着て、右腕には「民主聯

軍」と書かれた腕章を巻き担え銃の姿勢で、義勇軍行進歌を声高らかに歌いながら行進していた。これは中国共産党の正規軍で、「民主聯軍」と言われていた精鋭部隊で、この正規軍の進駐によってソ連軍が撤退し、市内の治安は見違えるほど良くなった。

四 引揚げ

昭和二十一年十月になると、日本への引揚げが開始された。ハルビンにいた避難民から開始されて、彼らは次々と南下して行き、残っている人も少なくなってきた。次いで在ハルビン在留邦人も引揚げが始まった。私たち一家もそれにより南下することになり、第一梯団約二千人のグループの一員として、ハルビン駅から客車に乗り込み、思い出にいったいに詰まったハルビンをあとにすることとなった。

リュックサック一つを背中に背負って列車に乗ったが、どうしたことか何の感慨も感傷も沸いてこなかった。ただ、この二、三年の目まぐるし

かった激動の流れだけが、走馬鑑のごとく頭の中を駆け巡っていた。途中、国共内戦で破壊された第二松花江の鉄橋の残骸を横目で見て、渡し船で渡り再び列車に乗って、奉天を通って錦州に着いた。錦州では、乗船の順番を待つために数日滞在したが、ここまで来ればもう大丈夫という安どの気持ちのみなぎっていたが、その反対に安心感が因となって亡くなる人も続出していた。かわいそうな場面がいくつもあったが、私ではどうしようもなかった。

葫蘆島コロトウの収容所に収容されて、引揚船の入港を待っていた。その間にも、ハルビンから続々と避難民の集団が到着した。その人々たちも、まだハルビンに残留している鉄道関係の人たちの温かい援助の手により、無事にここまで南下して来たとのことだった。同胞相助け合って一日も早い引揚げに努力していることを知り、感激したものだ。葫蘆島からの引揚船は、アメリカのリバティー型輸送船で、約一万屯近くもある立派な船

だったので、ほっと胸をなで下ろしたものだ。た。

乗船して岸壁を離れた所に、突然近くで「満州のバカヤロー！」と、大声を出して叫んだ子供がいた。よほどつらいことがあったのだろうし、悲しい目にも遭ったのだろうと、その子供の心情を思い、こっちももらい泣きをしました。

船旅は順調で、アメリカ製の船なので船内も割合に広くてゆっくりしていたし、それにも増して清潔で、今までの苦勞とは雲泥の差で、快適に近いものだった。

五 帰国そしてその後の生活

数日の航海が過ぎて博多港に接岸した。「引揚者の皆さん！ 長い間大変にご苦勞さまでした」という横断幕が、博多港岸壁の建物の屋上に掲げられてあった。スピーカーからは、田畑義夫の「かえり船」のメロディーが流れていた。それらを見たり聴いたりした人々は、それぞれに今日までのつらかった避難行を振り返り、感慨無量な面

持ちであった。私も万感胸にせまって、言葉が出ずにただ涙がこみ上げてくるばかりだった。だが、やはり嬉しかった。生きて日本に帰って来られたということは、最大の喜びであった。しかし落ち着いて考えると、私にとってほとんど日本は初めての国、幼いころに一時住んだとはいえ記憶に残るほどではなく、まったくの新天地と同じで一抔の不安もあったが、それを打ち消すほど嬉しさの方が大きかった。博多の岸壁には祖父が迎えに来ていて、私たちは感激した。

日本での生活が始まったが、祖父に「勉強だけはしろ！ 学校だけは行け！」と、強く言われた。親類の家を三カ月、半年、九カ月とたらい回しに転々としながら、神戸二中を苦勞しつつ何とか無事に卒業し、さらに上級の学校に行きたかった。だが現実の問題としては、一日にどんぶり一杯、一日に三個のサツマイモの生活では無理だった。避難生活中のあの苦勞を過ごしてきた経験があるとはいえ、生きていくことは容易ではなかつ

た。歯を食いしばっても生きていけないと考えると、必然、進学を諦めるしか生きる道はなかった。「落ちぶれて、袖に涙のかかるとき、人の心の奥ぞ知らるる」という思いで、警察官を志願した。以来、四十数年警察官を天職と心得て頑張ってきた。

警察官を定年退官し、退職金の一部で折からのバブル景気に乗っかって株式投資もしたが、儲けは子供の学資の一部に消えてしまった。父のような発想と決断は、私にはできなかった。

生まれ、そして育った満州は、私の故郷である。勉強もしたし遊びもしたが、すべて今になれば思い出である。

漢民族の思想と哲学が込められている「成語（熟語のこと）」は、無数にあるが、私はその中から二千八百語を日本語に訳して、ワープロに打ち込み、時折読んでは楽しんでるが、それが心の糧にもなっている。

それにしても父のことは忘れ難いものがある。

毛皮のトルコ帽をかぶり、シューバの襟を立てて歩く父、酒を飲んでチャイナ節を歌っていた父、そして「日露貿易」「日貨普及」を志して渡満したが、志半ばで亡くなった父、鎮魂の情、切なるものである。

最後に、中国の連句を記して私のつたない引揚
勞苦記録を閉じる。

「浮雲長長長長消」 人の命

（人の命は空に浮かぶ雲のようなものだ。生まれては大きくなり、また生まれては大きくなるが、いずれは死んでゆく）

「海水朝朝朝朝朝朝落」 人の運

（人は運を、朝起きては天に祈り、また朝がくれば祈るがしかし運は結末を迎える）

合掌

大陸の花嫁

京都府 井筒 紀久枝

一 決意

私は大正十（一九二一）年一月十八日生まれだが、自分の父親を知らない。母は、不倫をしたのか強姦されたのか知らないが私を生んだ。母は赤ん坊の私を連れて、隣村の貧しい継子のある家へ嫁いだ。そこは福井県今立郡岡本村大滝、現在の今立町、越前和紙の産地である。その家も紙を漉いていた。母は、私という連れ子をしてきたひけめと、見たこともなかった紙漉きを覚えなければならず、気苦労があったと思う。

私は、十歳年上の継兄にいじめられ、養父に睨まれ、また母のストレスが私に集中し、身のおきどころがなかった。私が三歳のときに妹が生まれた。そのころ母は、紙漉きには必要な「ネリ」に